

新年明けましておめでとうございます。

職員の皆様方におかれましては、令和6年という輝かしい年をご家族揃ってご壮健にてお迎えになられたことと心からお慶び申し上げます。

昨年は、それぞれの職務において町政進展、また住民福祉増進の上にお力添えをいただきありがとうございました。

まずは、元日に発生した石川県能登半島地震では甚大な被害が発生しました。多くの方々がお亡くなりになり、いまだ救出活動が行われています。

心からお悔やみを申し上げますと共に、一刻も早い救出と、復興を願っています。

三芳町では、東日本大震災、熊本地震の際には、ボランティア派遣等支援活動を行いました。今回も町としてできる支援活動は実施したいと考えています。

さて、昨年を振り返ると、5月8日に、新型コロナウイルスの感染症法上の分類が「5類」に引き下げられました。規制が緩和され、コロナ前のように徐々に経済活動も活発となり、事業や社会活動も再開されました。

9月2日には、4年ぶりに「みよしまつり」が開催され、「世界一のいも掘りまつり」、「町民体育祭」、「みよし芸術祭」、「産業祭」などの多くのイベントが復活し、町民の皆さんの笑顔と元気な姿が街にあふれました。

私たちは、3年余りの間、不安と閉塞感の中でコロナと戦い、パンデミックを経験し、あらためて健康のありがたさ、人と人との絆の大切さを学びました。そして、大切な人と共に生きていることが、平凡であっても、そこに幸せがあるということを実感しています。

そのコロナ禍においも職員の皆さま方には、それぞれの担当において多くの

まちづくりの成果をあげていただきました。

本日は、この後に、中でも顕著な功績を残された皆さんを表彰させていただきます。

まちづくりの成果は短期間で上げることができるものと、長い年月を要するものがあります。長い年月をかければ良いということではありませんが、昨年、7月5日にFAO（国連食糧農業機関）から、360年以上にわたって継承されてきた武蔵野の落ち葉堆肥農法が世界農業遺産に認定されました。

認定まで10年かかりました。世界で当地域の農法が評価いただいたこと、また昨年の埼玉県の10大ニュースに入ったこともあり、認定までの経緯について、職員の皆さんと共有しておきたいので、少し紹介したいと思います。

世界農業遺産について知ったのは、2012年（平成24年）、淑徳大学で開催された「農と里山シンポジウム」でした。

東京農業大学元学長、名誉教授の進士五十八先生はじめ関係者から当地域の農法は、その可能性があるのでは是非申請するようにと推薦をいただきました。

翌平成25年、石川県能登で世界農業遺産国際会議が開催され、埼玉県農林部のご紹介で参加しました。この会議で世界農業遺産の意義と重要性を認識し、認定を目指すことを決意いたしました。

世界農業遺産は、世界各地に継承されてきた家族経営による伝統的農法、それらは、文化や社会組織のみならず、生物多様性や美しい景観も保全継承しています。

さらに、家族経営による食糧供給は、人類の食糧の7割を占めており、人類の飢餓や貧困を撲滅するためにも世界農業遺産の認定地域を増やしていこうというものでした。

今日では、SDGsへの貢献も農業遺産の重要性として強調されています。

しかし、認定への道のりは決して平たんではなく、長い歳月を必要としました。

国連大学サステイナビリティ高等研究所の永田明さんは、長年にわたり当協議会を見守り、ご指導いただいた方ですが、今回の認定について昨年 10 月、世界農業遺産についてのコラムで次のように述べています。

長くなりますが紹介させていただきます。

『ナビゲーター（永田さん）が初めて現地を訪問したのは、もう 10 年近く前の 2014（平成 26）年 1 月でした。

小学校の屋上から三富新田の土地利用の景観を見て、首都の近郊にこんなに素晴らしい持続的な土地利用があったのかと感動したのを覚えています。それ以来、「落ち葉掃き」の体験や家族での芋掘りイベントへの参加を含め、10 回ほど現地を訪問しています。

これだけ素晴らしい持続的な土地利用でありながら、認定までの道のりは大変厳しいものでした。一番難しかったのは、やはり都市近郊であるが故の地域のまとまりだったのではないかと思います。

2014（平成 26）年度に初めて世界農業遺産に挑戦したものの、関係地域全体の合意が得られていなかったことなどから、農水省の推薦は見送られました。

その後、2016（平成 28）年度に世界農業遺産申請の承認及び日本農業遺産への認定申請を行い、日本農業遺産には認定されたものの、世界農業遺産申請の承認は得られませんでした。

2018（平成 30）年度も世界農業遺産の申請に挑戦したものの、今度も農水省の承認が得られず、2020 年度の 4 度目の挑戦でようやく世界農業遺産認定申請の承認を得ることができました。

この間、三芳町を中心に、申請書の内容を大幅に改善するとともに、関係地域との話し合いを続け、大きく地域をまとめてこられた成果の表れだと思います。

まさに「苦節十年」、今回、世界農業遺産の認定を受けることができました。

特筆すべきは、やはり三芳町の林伊佐雄町長（私の名前があげられていますが、歴代の観光産業課長はじめ、認定に向けて取り組んだ庁内横断的チームの総称と解釈してください）の熱意とリーダーシップと忍耐力です。

ナビゲーターが担当する東アジア農業遺産学会（ERAHS）にも、今年を含め、このところ毎回、町長自らが参加され、各国、各地域の経験を学ぶとともに、FAO から来られた方にも積極的にアプローチしておられました。

同じ「都市農業遺産」ということで、中国の河北省・宣化のブドウの世界農業遺産の認定地域との交流などにも取り組んでこられました。

また、ベテランの農家の方、若い後継者の方など、地域の農家の方々も熱心でした。都市的開発の圧力や相続税の問題などがある中で、皆さん信念をもって落ち葉堆肥農法による農業を続けてこられました。

これからは、晴れて世界農業遺産の認定地域として、国内のみならず、世界に向けた取り組みを展開されることと期待しています。』

永田さんは、客観的に長い間、私たちを見守ってくれていましたが、まさにその通りだったと思います。

永田さんが指摘されたように申請書も FAO や専門家会議の指摘に基づき、何度も何度も職員の皆さんに書き替えていただきました。

- ・ 3市1町にまたがっているが対象エリアはどこなのか。その境界は？
- ・ 落ち葉堆肥を使用した野菜は、使用していない野菜とどう違うのか。

それは、美味しいのか。

- ・落ち葉堆肥を入れた土壌は、他の地域の土壌とどのように異なるのか。
- ・それらのエビデンス、科学的根拠はあるのか。
- ・当地域の生物多様性の分析データはあるのか。
- ・都市近郊の中で継続していく後継者やサポート体制、社会組織はどうなっているのか。
- ・世界の中で、落ち葉堆肥を使用している地域もあると思うが、当地域の独自性は。
- ・そして、申請書の英訳

などなど数多くのハードルがありました。これらの課題を一つ一つ、一年一年解決していき、今日に至ることができました。

昨年6月22日、7月5日の認定に先立ちFAO科学助言グループの中国李先生が、現地調査に来られました。視察を終えた後の講評で次のように述べられました。

「大都市近郊にもかかわらず、360年にわたって継承されてきたことは奇跡である。しかも、多くの若手後継者がいて六次産業も進んでいる。このシステムには生命力がある。」と。

この時、当地を開拓し農法を継承されてきた先人達、農家の皆さん、多くのご支援していただいた方々の顔が思い起こされ、思わず涙がこぼれてきました。

振り返ってみると、この10年間は必要不可欠でした。

平成24年、最初に世界農業遺産申請を薦めてくれた進士五十八先生も、最初に申請し、認定から落ちた時は、「一度や二度で受からない方がいい」と言われていましたが、今となっては良く理解できます。

それは、一度や二度では認定されないほどの研究、調査、それに基づく科学

的根拠、エビデンスによって世界農業遺産認定の 5 つの条件を満たし、それを未来にわたって継承していく意志と覚悟を明確に FAO、世界に示さなければならぬからです。

昨年、12 月 16 日に世界農業遺産認定記念式典を開催しましたが、多くの国会議員、3 市 1 町の県議員、市町の議員、さらには、遠路九州や京都からもご指導いただいた先生方にも駆けつけていただき、実践農業者、賛助会員の皆さん、歴代の農林部長、振興センター所長にも大勢ご出席していただきました。

こうした、10 年という長い歳月と多くの人との出会いは貴重な財産であり、今となっては他の認定地域に負けない応援団のように思います。

世界農業遺産認定は、あくまでもゴールではなくスタートです。これから多くの皆さんのご協力をいただきながら、当地域の農法と麗しき里山を未来の子ども達へ継承していくのが私たちの使命です。

そして、今回の世界農業遺産認定までの過程で学んだことがいくつもあります。

それは、どんな仕事においても、人生においても生きていく上で重要な原理原則ではないかと思います。

まず、一つ目に、人との出会いを大切に、そのご縁に誠の心を捧げる。10 年間、本当に多くの人と出会い、ご指導、ご協力、ご支援をいただきました。職員の皆さんはもとより、多くの皆さんの力をお借りしました。

人間一人の力はたかが知れています。多くの人々の力が一つになれば大きな力になります。物事のすべては、人と人との出会いから始まります。一人ひとりの出会いを大切に、そこに誠の心を捧げることが大事だと思います。

一期一会、人との出会いを大切にすることです。

二つ目に、積小為大 小さなことを積み重ねていく。

二宮尊徳の言葉に

「大事をなさんと欲せば、小さなことを、怠らず勤しむべし。小積りて大となればなり。」とあります。

小さな出会い、小さなアドバイス、小さなアイデア、小さな気遣い、小さな表現など小さなことの積み重ねが大事です。小さなことを決しておろそかにしてはいけないと思います。

三つ目に、信念とビジョン、使命観を持ち続ける。

今回の認定に向けて最も大きなポイントは、開発が進む首都近郊にありながら保全継承は可能なのか、また、広域的な地域（3市1町）をどうまとめていくかということでした。

農法としては高い評価をいただいていたのですが、世界農業遺産の中で都市農業の評価が定まっていませんでした。認定地域のほとんどは、自然豊かな地方にあります。

しかし、唯一、都市農業で世界農業遺産に認定されている中国の宣化のぶどう栽培がありました。二度、宣化に赴き、宣化武蔵野都市農業宣言を世界に発信しました。

さらに、当地域は、通常の都市ではなく、メトロポリタン（大都市）東京の近郊にあり、世界では他に事例はありません。

必ず、いつか道は開けると信じていました。

また、広域的な自治体のまとまりについては、関係自治体の首長さんをはじめ関係者の皆様のご協力をいただくことができました。

そして、その信念を支えていたのは、美しき故郷を未来の子ども達に継承したいという強い使命感によるものでした。

お陰様で、皆様のご協力をいただき、世界農業遺産に認定していただきましたが、この3つのポイントは、どんな仕事においても、人生において生きていく上で重要な原理原則であると考えます。

皆さんも、今年一年、仕事や人生において、人との出会いを大切に、小さなことを積み重ね、信念をもって生きていってほしいと願います。

むすびに、いつも私自身が肝に銘じている言葉があります。

孔子の言葉です。

「冉求曰（いわ）く、子の道を説（よろこ）ばざるに非ず、力足らざればなり。子曰（のたまわ）く、力足らざる者は中道にして廃す。今汝は画（かぎ）れり。」

『論語』 雍也第六

冉求が言った。「先生の説かれる道を喜ばないわけではありませんが、ただ何分にも私の力が足りませんので行うことが出来ません。」

先師が言われた。「力が足りないかどうかは、力の限り努力して見なければわからない。力の足りない者は途中でたおれるまでのことだが、今お前は、はじめから見切りをつけてやろうとしない。それでは、どうにも仕方がないよ。」

新しい1年がスタートします、

皆さんには無限の可能性があります。その皆さん自身の力を信じて、この1年間、それぞれの目標や使命に向かって力の限り努力してください。

必ず、道は開けます。

これから寒さも一段と厳しくなります。健康管理には十分ご留意いただき、



職員とご家族が共に健康で、充実した一年を過ごされることを心から願いました年頭のあいさついたします。